

量子力学

第11回目(6/27)

2AM 前期木曜2限

先進工学部マテリアル創成工学科 田村隆治

tamura☺rs.tus.ac.jp

認証コード : 6533



今回の授業で身に付くこと

二原子分子の回転のエネルギー固有値の求め方を理解する。

振動と違い、回転は励起状態にあることを理解する。

第 n 励起状態に励起されている N_2 分子の数と基底状態にある N_2 分子の数の比を計算できる。



前回の復習

一粒子の回転を表す時間に依存しないSchrödinger方程式

$$\frac{\hat{l}^2}{2I}|\Psi\rangle = E|\Psi\rangle \quad I \equiv mr^2 : \text{慣性モーメント}$$

角運動量の定義

$$[\hat{l}_x, \hat{l}_y] = i\hbar \hat{l}_z \quad [\hat{l}_y, \hat{l}_z] = i\hbar \hat{l}_x \quad [\hat{l}_z, \hat{l}_x] = i\hbar \hat{l}_y$$

角運動量の二乗、そのz成分の固有値

$$\hat{l}^2|lm\rangle = l(l+1)\hbar^2|lm\rangle \quad l = 0, \frac{1}{2}, 1, \frac{3}{2}, 2, \dots$$

$$\hat{l}_z|lm\rangle = m\hbar|lm\rangle \quad m = -l, -l+1, \dots, l-1, l \quad 2l+1 \text{ 個}$$

※軌道運動の場合は後で示すように l は整数に限られる。



m はこれで尽くされているか

上昇演算子を作用させるとゼロになる m の値を調べる。

$$\hat{l}_+ |\lambda m\rangle = 0 \quad \lambda = l(l+1) \quad l: m \text{の最大値}$$

左から下降演算子を掛けて

$$\begin{aligned} \hat{l}_- \hat{l}_+ |\lambda m\rangle &= (\hat{l}^2 - \hbar \hat{l}_z - \hat{l}_z^2) |\lambda m\rangle = (\lambda \hbar^2 - \hbar m \hbar - m^2 \hbar^2) |\lambda m\rangle \\ &= \hbar^2 (\lambda - m - m^2) |\lambda m\rangle = 0 \quad \therefore \lambda = m^2 + m \end{aligned}$$

$$\lambda = l(l+1) \text{より、} (l-m)(l+m+1) = 0$$

$$\therefore m = l, \text{もしくは、} m = -l - 1$$

$-l \leq m \leq l$ なので、上昇演算子を作用してゼロになるのは $m = l$ のときのみ。

従って、 m の値は l から自然数を引いた値でなければならない。
でないと、 \hat{l}_+ を作用させていくと m の値が無限に増加することになる。
(l が最大値であることと矛盾する)

以上より、 m の値は以下の値に限られることが結論される。

$$m = -l, -l+1, \dots, l-1, l$$



\hat{l}_z の固有関数

角運動量z成分の演算子(極座標表示)

$$\hat{l}_z = -i\hbar \frac{\partial}{\partial \phi}$$

※導出方法は補助資料を参照のこと。

固有値方程式 $\hat{l}_z |m\rangle = m\hbar |m\rangle$

固有関数 $\Psi_m(\phi) = Ce^{im\phi} \quad \because -i\hbar \frac{\partial}{\partial \phi} \Psi_m = -i\hbar C i m e^{im\phi} = m\hbar \Psi_m$

ϕ と $\phi + 2\pi$ は同じ位置なので、**波動関数の一価性**を要請する。

$$\Psi_m(\phi + 2\pi) = \Psi_m(\phi)$$

$$e^{im\phi} = e^{im(\phi+2\pi)} \quad e^{2\pi mi} = 1 \quad m: \text{整数}$$

$$\hat{l}^2 |lm\rangle = l(l+1)\hbar^2 |lm\rangle \quad l = 0, 1, 2, 3, \dots$$

※位置の関数で表される古典的な軌道運動の場合は l は整数に限られる。

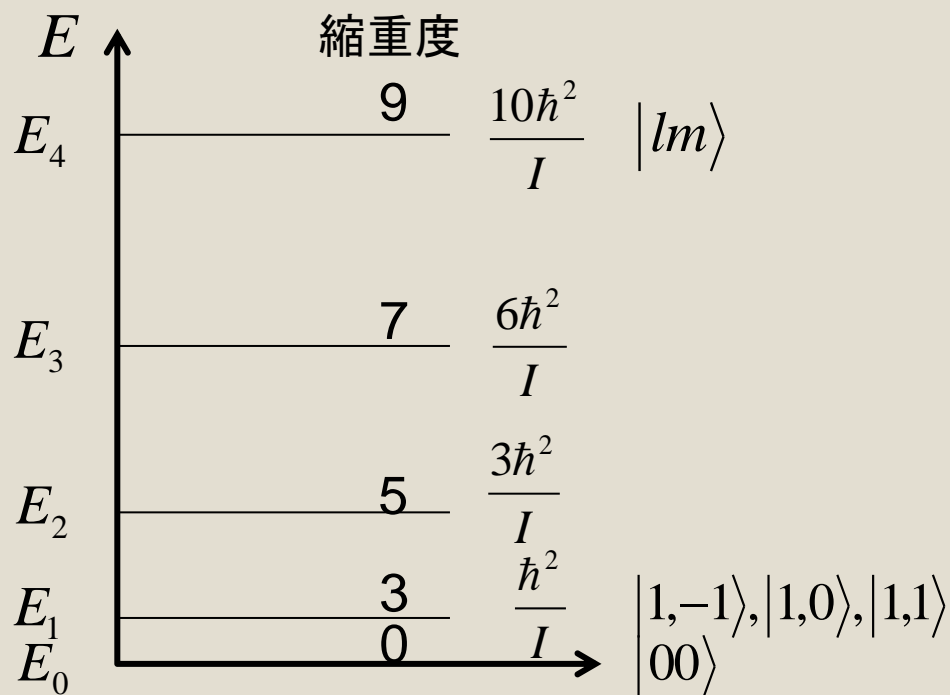


回転運動 $\hat{H} = \frac{\hat{l}^2}{2I} \quad \hat{H}|lm\rangle = \frac{1}{2I} l(l+1)\hbar^2 |lm\rangle$

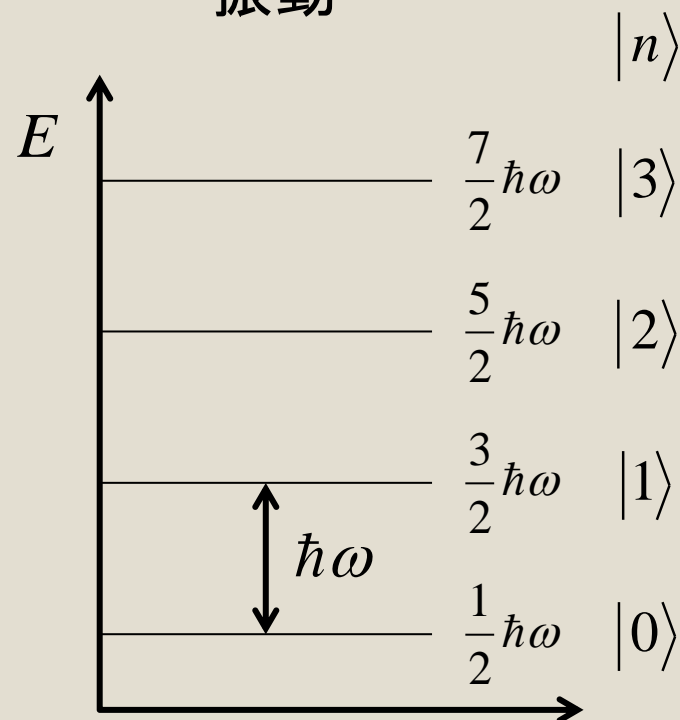
固有ケット $|lm\rangle \quad l = 0, 1, 2, 3, \dots \quad m = -l, l+1, \dots, l-1, l$

固有値 $E_l = \frac{1}{2I} l(l+1)\hbar^2 \quad (2l+1) \text{ 重縮退}$

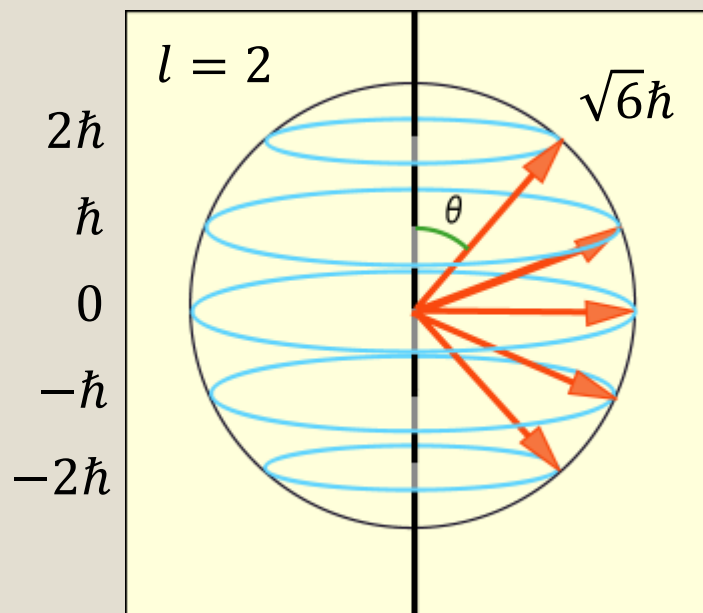
回転



振動



方向量子化



$|lm\rangle$: 角運動量二乗と角運動量z成分の同時固有状態

固有値

角運動量二乗 $l(l+1)\hbar^2$

角運動量z成分 $m\hbar$

角運動量のx成分とy成分は不確定となる。
(測定すると固有値 $m\hbar$ のどれか一つが得られる)

角運動量について確定できるのはその大きさと一成分のみなので、古典的に考えると上図のようになる。角運動量ベクトルの終端が水色の円上のどこかにあり、定まらない。(測定するとどこかで見い出される)

また図からわかるように、角運動量は任意の方向を向くことができない。このように角運動量の向きが離散化されることを、**方向の量子化**という。

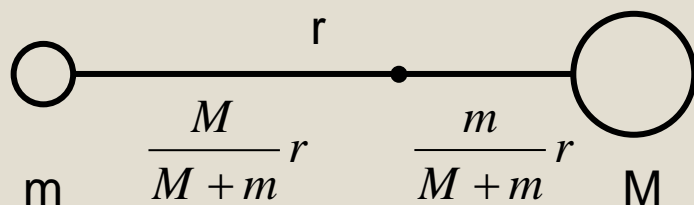


2原子分子の回転

重心を中心に同じ角振動数 ω で回転する2つの粒子のエネルギーの和。

エネルギー
$$E = \frac{1}{2}Mr_1^2\omega^2 + \frac{1}{2}mr_2^2\omega^2 = \frac{1}{2}(I_1 + I_2)\omega^2 \equiv \frac{1}{2}I\omega^2$$

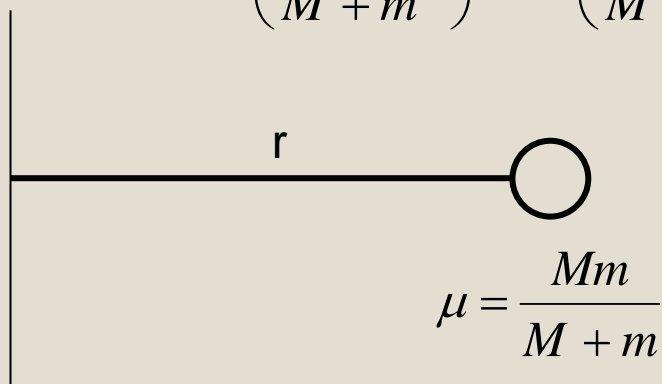
※合成慣性モーメント $I \equiv I_1 + I_2$ をもった1粒子の角振動数 ω の回転のエネルギーと式の形は同じ。



ハミルトニアン
$$\hat{H} = \frac{\hat{l}^2}{2I} \quad I = I_1 + I_2$$

合成慣性モーメント

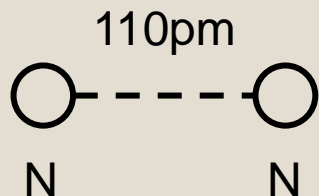
$$I = M\left(\frac{m}{M+m}r\right)^2 + m\left(\frac{M}{M+m}r\right)^2 = \frac{Mm^2 + mM^2}{(M+m)^2}r^2 = \frac{Mm}{M+m}r^2 \equiv \mu r^2$$



換算質量 $\mu = Mm/(M+m)$ をもった1個の粒子の回転と等価。



N₂分子の回転



$$E_l = \frac{l(l+1)}{2} \frac{\hbar^2}{I}$$

換算質量(原子量単位)

$$\mu = \frac{14 \times 14}{14 + 14} = \frac{14}{2} = 7 \quad \mu = 7 \times \frac{10^{-3}}{6.02 \times 10^{23}} = 1.16 \times 10^{-26} \text{ kg}$$

$$I = \mu R^2 = 1.16 \times 10^{-26} \times (110 \times 10^{-12})^2 = 1.40 \times 10^{-46} \text{ kg} \cdot \text{m}^2$$

$$E_1 = \frac{\hbar^2}{I} = \frac{(1.055 \times 10^{-34})^2}{1.40 \times 10^{-46}} = 7.93 \times 10^{-23} \text{ J} = 0.495 \text{ meV}$$

N₂分子の振動のエネルギー間隔: $\hbar\omega = 0.291 \text{ eV} = 291 \text{ meV}$

熱エネルギー(室温): $300k_B = 0.0258 \text{ eV} = 25.8 \text{ meV}$

※振動のエネルギー間隔は熱エネルギーより1桁大きいのに対し、回転のエネルギー間隔は2桁も小さい。従って、室温でも十分励起される。



一粒子分配関数

$$z = \sum_{n=0}^{\infty} \exp(-\beta E_n)$$

※和はすべての状態 n についての和

※同じエネルギーをもつ状態が複数あるときは、縮退しているという。

※縮退がある場合は、縮退した状態すべてについて和をとる。

一粒子の回転運動の場合

$$z = \sum_{l=0}^{\infty} (2l + 1) \exp(-\beta E_l)$$

$$z = \sum_{l=0}^{\infty} (2l + 1) \exp\left(-\frac{l(l+1)\hbar^2\beta}{2I}\right) \quad \because E_l = \frac{l(l+1)\hbar^2}{2I}$$

2原子分子気体(1 mol)の場合

分配関数 $Z = z^{N_A}$

エネルギー $E = -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z = -N_A \frac{\partial}{\partial \beta} \ln z$

定積比熱 $C_v = \frac{dE}{dT}$



2原子分子の回転

$l=l$ の状態をとる N_2 分子の数を N_l 、 $l=0$ の状態をとる N_2 分子の数を N_0 としたとき、 N_l/N_0 はいくらか。

$$\frac{N_l}{N_0} = \frac{(2l+1) \frac{1}{Z} \exp(-\beta E_l)}{\frac{1}{Z} \exp(-\beta E_0)} = (2l+1) e^{-\beta E_l} \quad E_l = \frac{l(l+1)\hbar^2}{2I}$$
$$Z \equiv \sum_{l=0}^{\infty} (2l+1) \exp(-\beta E_l) \quad \text{分配関数}$$

例題: N_2 分子において N_{10}/N_0 を求めよ。

$$E_{10} = \frac{10(10+1)\hbar^2}{2I} \quad \frac{\hbar^2}{I} = 0.495 \text{ meV} \quad 300k_B = 25.8 \text{ meV}$$

$$\frac{N_{10}}{N_0} = 21 e^{-\frac{10 \cdot 11}{2} \cdot \frac{0.495}{25.8}} = 7.31$$

室温では、 N_2 分子の多くが回転の励起状態にある。
(振動は基底状態)



HI分子の回転

三次元で自由に回転している $^1\text{H}^{127}\text{I}$ の最初の4つの回転のエネルギー準位をeV単位で求めよ。ただし、 $R=160\text{pm}$ である。

$$\begin{array}{l} \text{換算質量} \\ \text{(原子量単位)} \end{array} \quad \frac{127 \times 1}{127 + 1} = \frac{127}{128} \quad \mu = \frac{127}{128} \times \frac{10^{-3}}{6.02 \times 10^{23}} = 1.65 \times 10^{-27} \text{ kg}$$

$$I = \mu R^2 = 1.65 \times 10^{-27} \times (160 \times 10^{-12})^2 = 4.22 \times 10^{-47} \text{ kg} \cdot \text{m}^2$$

$$\text{回転のエネルギー} \quad \boxed{E_l = l(l+1) \frac{\hbar^2}{2I}}$$

$$E_0 = 0$$

$$E_1 = \frac{\hbar^2}{I} = \frac{(1.055 \times 10^{-34})^2}{4.22 \times 10^{-47}} = 2.64 \times 10^{-22} \text{ J} = \frac{2.64 \times 10^{-22}}{1.6 \times 10^{-19}} = 1.65 \text{ meV}$$

$$E_2 = \frac{3\hbar^2}{I} = 4.95 \text{ meV} \quad E_3 = \frac{6\hbar^2}{I} = 9.90 \text{ meV}$$



第11回目のまとめ

以下の内容を良く消化して、説明できるようにしましょう。

一粒子の回転を表す時間に依存しないSchrödinger方程式

$$\frac{\hat{l}^2}{2I}|\Psi\rangle = E|\Psi\rangle \quad I \equiv mr^2 : \text{慣性モーメント}$$

角運動量の二乗およびそのz成分の固有値

$$\hat{l}^2|lm\rangle = l(l+1)\hbar^2|lm\rangle \quad l = 0, \frac{1}{2}, 1, \frac{3}{2}, 2, \dots$$

$$\hat{l}_z|lm\rangle = m\hbar|lm\rangle \quad m = -l, -l+1, \dots, l-1, l \quad 2l+1 \text{ 個}$$

※一粒子の回転のエネルギー固有値は $E_l = \frac{l(l+1)\hbar^2}{2I}$ となる。

※軌道運動の場合は l は整数に限られる。



レポート課題(40分)

1. 1モルの2原子分子の回転による比熱が高温極限で R となることを証明せよ。

分配関数 $Z = z^{N_A}$

$$z = \sum_{l=0}^{\infty} (2l+1) \exp\left(-\frac{l(l+1)\hbar^2\beta}{2I}\right)$$

※ヒント: β が十分小さいとして、 l に関する和を積分にせよ。

2. エネルギー等分配則をもとに、比熱が R になる理由を述べよ。

ヒント>>tamura☺rs.tus.ac.jpまで

※提出方法

〆切: 7/3(水)

提出先: LETUS

フォーマット: 手書き・ワープロいずれも可

ファイル形式: PDF

ファイル名書式: "82xxxxx材料太郎.pdf"

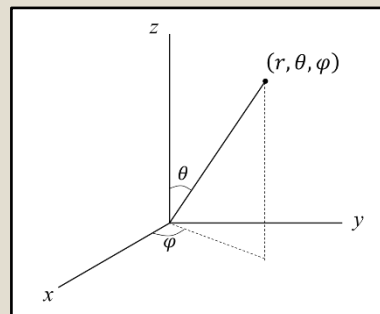


角運動量z成分演算子の極座標表示

補助資料

極座標表示

$$\begin{aligned}x &= r \sin \theta \cos \phi \\y &= r \sin \theta \sin \phi \\z &= r \cos \theta\end{aligned}$$



$$\frac{\partial}{\partial x} = \sin \theta \cos \phi \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\cos \theta \cos \phi}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} - \frac{\sin \phi}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \phi}$$

$$\frac{\partial}{\partial y} = \sin \theta \sin \phi \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\cos \theta \sin \phi}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{\cos \phi}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \phi}$$

$$\begin{aligned}l_z &= i\hbar \left(y \frac{\partial}{\partial x} - x \frac{\partial}{\partial y} \right) \\&= i\hbar r \sin \theta \left(\sin \theta \sin \phi \cos \phi \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\cos \theta \sin \phi \cos \phi}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} - \frac{\sin^2 \phi}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \phi} \right. \\&\quad \left. - \sin \theta \sin \phi \cos \phi \frac{\partial}{\partial r} - \frac{\cos \theta \sin \phi \cos \phi}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} - \frac{\cos^2 \phi}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \phi} \right) = -i\hbar \frac{\partial}{\partial \phi}\end{aligned}$$